

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 松浦 光

論文題目 現代日本語における気象現象の概念化
—概念メタファー理論によるアプローチ—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	鷺見	幸美
委 員	名古屋大学教授	玉岡	賀津雄
委 員	名古屋大学教授	杉村	泰
委 員	関西大学教授	鍋島	弘治朗

【論文の意義】

本論文は、認知言語学の枠組みで、概念メタファーの観点から、現代日本語における気象現象の概念化のプロセスを明らかにした論文である。具体的には、Lakoff and Johnson (1980) の概念メタファー理論に基づき、現代日本語の「明るい」「暗い」「熱い」「あたたかい」「冷たい」「晴れる」「曇る」「風」「嵐」「台風」といった言語表現を分析対象とし、そのメタファー的意味がいかに実現されるかを明らかにしている。

本論文が特に注目しているのは、「まだら」問題と呼ばれる現象である。Lakoff and Johnson (1980) の概念メタファー理論において、メタファー写像は一貫性を持つとされるが、実際には写像にギャップがあり、メタファー的意味の実現には制約が存在する。つまり、起点領域、目標領域の写像関係ではメタファー的意味が実現可能であるはずの表現が実際には存在しないという現象がある。先行研究では、このような現象を統一的に説明する原理の追求がなされてきた。

本論文では、「まだら」問題を切り口に、「現象の構成要素」という概念を導入して、気象現象を捉え直している。「現象の構成要素」は、認知主体がおかれる外界の現象に対する概念化のプロセスにおいて、身体経験に直接作用する要素と定義される。この「現象の構成要素」を用いて、気象現象を中心としたメタファー表現のそれぞれを分析することにより、一般的な原理では説明しきれないメタファー表現の意味の実現の基盤と制約を導き出している。

本論文は、概念メタファーによって産出される個別的なメタファー表現の記述をしたものである。豊富な事例に基づき、気象現象に関するメタファー表現それぞれについて説得力のある考察・分析を行い、その概念化のプロセスを解明している点で評価できる。また、メタファー表現の分析を通し、それぞれのメタファー表現を産み出す概念メタファーの存在を検証すること、今まで見過ごされてきたメタファー写像の偏りや複数の概念メタファーの関連を考察することで、メタファー研究への貢献を果たしている。

【論文の概要】

本論文は、序論（第1章）、本論（第2章～第7章）、結論（第8章）から成る。以下、順にその概要を述べる。

第1章では、研究の動機と目的を述べ、考察対象を明示している。また、「現象の構成要素」という概念を提示し、説明している。

第2章では、認知言語学における概念メタファー理論に至るまでのメタファーの研究史を振り返った上で、認知言語学におけるメタファー研究の理論的背景をまとめ、概念メタファー理論の争点を指摘している。また、前提とする言語観と援用する諸概念について述べ、本論文が「身体性重視」の立場をとることを明確にしている。

第3章では、身体経験において視覚で知覚される「明るい」と「暗い」を対象として、メタファー表現の意味の実現と制約を考察している。明るさの概念化には「光」により照らされる空間とそれを視覚で捉える知覚者が存在すること、明るさは発光体を光源とする持続的な「光」により保たれること、遮蔽物により「光」が遮られることにより暗くなること、「光」は空間との関係によって届き方が変わること示し、概念メタファー<<喜びは光>>、<<知識は光>>、<<希望は光>>における光源（発光体・反射体）、光り方（瞬間的・持続的）、届き方（前/後・中心/周辺）という3点の「光」の捉え方を提案し、この3点の「光」の捉え方が、目標領域の感情・知識・時間における「明るい」

「暗い」のメタファー的意味の実現に影響を与えていることを解明している。

第4章では、身体経験において触覚で知覚される「熱い」「あたたかい」「冷たい」を対象として、メタファー表現の意味の実現と制約を考察している。温度感覚の概念化には、温度感覚を生起させる発生源、温度感覚を知覚すると捉えられる感覚主体、温度感覚について判断する観察者が関係することを示し、これらの温度感覚の捉え方が目標領域である人間の性格・言動におけるメタファー的意味の実現の制約にもなることを明らかにしている。また、「熱い」「あたたかい」「冷たい」において、概念メタファー<<興奮は熱>>、<<愛は火>>、<<優しさはあたたかさ>>が影響を与えていることを指摘し、これらの概念メタファーの働きにより「熱い」「あたたかい」「冷たい」が直接明示されない温度感覚に関するメタファー表現が解釈されることを示している。

第5章では、気象現象を表す「晴れる」「曇る」を対象として、メタファー表現の意味の実現と制約を明らかにしている。気象現象としての「雲」に遮蔽物・移動物、「霧」に遮蔽物としての性質を認め、「晴れる」「曇る」という現象の構成要素として「光」と遮蔽物と移動物を提示した上で、この現象の構成要素が目標領域におけるメタファー的意味の実現に影響を与えていることを指摘している。この考察を通して、現代日本語における<<感情は天候>>、<<思考は天候>>、<<状況は天候>>という概念メタファーの存在を検証し、現象の構成要素を想定することによってメタファー表現の写像の偏りや性質の違いを解明できることを示している。

第6章では、気象現象である「風」を対象として、社会情勢や人間関係などの様々な状況の変化がメタファー表現の「風」を通して理解されることを考察している。まず、「風」が現象の構成要素として「方向」・「力」を持つこと、「方向」には、前/後・上/下、「力」には、強/弱が存在すること、「風」の様々な性質が時間的展開に基づき一連の構造を形成することが示され、状況変化の要因に対する評価が「風」の方向・力を通して概念化されることが述べられている。そして、「風当たり」や「先輩風」をはじめとした人間を「風」の発生源と捉えるメタファー表現の基盤については、概念メタファー<<状況は天候>>の影響を受け、不特定多数の発生源の言動によって作り出される状況を「風」として捉えていることも指摘され、この概念メタファーが<<言動は風>>として生産性を持つことも述べられている。また、「世間の風」や「隙間風」の考察を通して、<<優しさはあたたかさ>>、<<親密さは近さ>>など、「風」と複数の概念メタファーが関わっていることも示している。

第7章では、「嵐」と「台風」について、「～の嵐」、「(人・組織) + 台風」、「台風の目」というメタファー表現の考察を行っている。この考察を通して、<<状況は天候>>における「嵐」と「台風」は、メタファー的に共に状況の大きな変化を表すが、「嵐」は状況の変化そのものを表すのに対し、「台風」は脅威となる大きな状況の変化の発生源を表すという点で異なることを示し、その違いが「嵐」と「台風」が固有に持つ性質の違いに基づくこと、この性質の違いがメタファー的意味にも影響を与えていることを明らかにしている。

第8章では、本論文の結論と今後の課題を述べている。

【審査委員会による審議および合否判定】

口述試験では、まず、申請者が博士論文について、各章の概要を説明したのち、第3章を詳しく説明した。その後、申請者と各審査委員との間で質疑応答が行われた。わかりにくい点について明確化を求める質問の他、依拠する言語観についての質問も出されたが、申請者からそれぞれそれぞれの質問について適切な回答が得られた。

別紙 1 - 2

審査委員全員の一致した評価は、興味深い言語現象を見つけ出し、言語事実を丁寧に観察することにより、日本語における気象現象に関するメタファー表現が、どのような動機付けをもって、何を表すのかを明らかにした点で意義があるというものであった。一方で、問題点・改善点として指摘されたのは、1) 先行研究が羅列されていて、その相互関係や本論文の位置づけが明確に示されていない、2) 本論文において重要な「現象の構成要素」という道具立てについて、その仕組みが十分には明確にされていない、3) 考察対象の網羅性と主張の一般性に欠け、気象現象の概念化の全体像が示されていない、4) 概念メタファー研究として、新たな概念メタファーの発掘や概念メタファーについての踏み込んだ議論には至っていないという四点である。3) 4) については、本論文が一般性を志向する研究ではなく、言語事実の観察を積み重ねることによって、現代日本語における気象現象の概念化を記述したケーススタディ的研究であること、メタファー表現の分析・記述により概念メタファー研究に間接的な貢献をする研究であることが確認された。

このように本論文には不十分と思われる点もある。しかし、本論文は、一般性を追求することによって見落とされがちな言語事実注目し、気象現象がどのように捉えられているかを詳細に観察することによって、メタファー的意味の実現に影響を与えている要因を具体的に示したという点で優れた論文であり、全体として質量ともに博士學位論文として十分にその水準に達しているという評価が審査委員会全員で一致した。したがって、本論文を合格と判断した。